



長林寺 慈しみの碑 (足利市)

(公財) 中村元東方研究所 / 東方学院

東方だより

平成 29 年度前期号 (通号第 30 号)

〒 101-0021
 東京都千代田区外神田 2-17-2
 延寿お茶の水ビル 4 階
 TEL: 03-3251-4081
 FAX: 03-3251-4082
 URL <http://www.toho.or.jp>

目 次

長林寺の「慈しみ」の碑	・今後の行事ご案内	7
・前田専學理事長	平成 29 年度芳名録	7
理事ご紹介	研究活動	
・清水谷善圭理事	・研究所コラム 水上文義専任研究員	8
監事ご紹介	・科学研究費 基盤研究 (C)	
・吉田宏哲監事	ヴァイシェーシカ学派の<関係>概念の総合的研究	
東方学院	平野克典専任研究員	9
・講師のご紹介 横山紘一講師	・研究員の声 平岡三保子専任研究員	10
勝本華蓮講師	袋井由布子専任研究員	11
・研究会員の声 西内之朗さん	新刊紹介	8・9・10・11
石川和雄さん	事務局通信	12
行事イベント報告		
・新春研究発表会 他		

長林寺の「慈しみ」の碑

—理事長ご挨拶にかえて—

前田専學理事長



本紙のカー写真の碑は、平成 4 年 11 月 22 日に足利市にある名刹長林寺の境内に建立されました。

その数ヶ月前のこと、仏教とジャイナ教に通じた優れた研究者で長林寺のご住職でもある矢島道彦師は、中村先生に、岩波文庫所収の中村先生訳『ブツダのことば』第一四五〜一五一詩節の邦訳を右に刻み、インドの名君アショーカ王法勅文の現代版として後世に残したいという趣旨のお手紙を差し上げ、ご快諾を得られました。その碑の除幕式が足利学校での講演を翌 23 日に控えた中村先生ご夫妻のご出席のもとに行われました。

仄聞するところによりますと、先生は平成 7 年の誕生日に「慈しみ」の碑の建立を発願され、平成 8 年 3 月 25 日に医師でもある奥様から前立腺癌であることをお聞きになり、平

成 9 年の奥様の誕生日に完成したということ。先生は平成 11 年 10 月 10 日に逝去されました。妙勝寺の高松榮子様によりますと、自坊に完成した碑（本紙第 29 号参照）の写真を先生にお見せしたところ「それは私も欲しいな」と仰せになられたので、先生のご自宅のお庭に献上するつもりで準備を始められましたが、理由は分からないまま先生は途中でお断りになったそうです。これらの事件を時系列で辿っていくと、先生が「慈しみ」の碑を建立されるに至った経緯が臆気ながら分かってくるように思われます。

戦争の世紀二十世紀に生まれ亡くなられ、第二次大戦中短いながらも入隊経験もある先生は、その前半生を「世界平和の実現のための手がかりを供する」比較思想の研究に没頭され、『世界思想史』（全七巻）の巻末に、「人類は一つである」という結論を示されました。そして「文明の発達は地球を狭くし、世界を一つの方向に進めつつあり、われわれはその中から逃げることなく、そこに発生する諸問題に対処しながら、へいかに生きるべきか？」を自分自身で考えていかなければならない。状況におかれていたことを痛感されました。先生はその問題の解決を、長年探求されてきた東洋の思想の中に求められ、長い間考え自ら実践してこられた仏教の普遍的な実践徳目である「慈悲」、すなわち「温かなこころ」

に到達され、その普及の方法をお考えになっていたと思われまます。

そんなある日、矢島師からの「慈しみ」の碑建立の依頼が入り、平成 4 年に喜んで除幕式に参列されたものと思われまます。平成 5 年に岐阜県犬山市の道心会の折に「温かいこころ」を熱く語られ、平成 7 年に妙勝寺に建立された石碑の写真をご覧になり、普及のためにご自身も建立したいと思われるようになり、榮子様には「私も欲しいな」と言われ、榮様は石碑を献上しようとされたのではないのでしょうか。

しかしその案は没となったものの、平成 7 年の先生の誕生日、すなわち 11 月 28 日、に庭は狭く相続人もいないので墓地に、「慈しみ」の碑の建立を発願されたのではないのでしょうか。

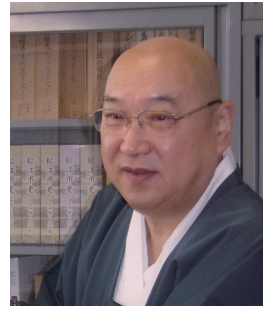
しかし平成 8 年 3 月 25 日に前立腺癌の告知を受けて、治療などのために実現が遅れ、平成 9 年の奥様の誕生日、すなわち 5 月 4 日に完成したのではないかと推測されます。碑文は、場所の制約もあり、経典のことばの精髓を汲み取って意識され、先生の世界平和実現への熱い願いを込めて、ご夫妻で「如何に生きるべきか」を後世の人々に刻み残されたものと思われまます。



理事ご紹介

中村元記念館を創設

清水谷善圭 理事



しみずたに ぜんけい
昭和 45 年 3 月大正大学仏教
学部卒業、同年 4 月安来清
水寺入寺。昭和 54 年 8 月
清水寺第 6 世貫主拝命。平
成 23 年 11 月特定非営利法
人中村元記念館東洋思想文
化研究所理事長就任。島根
県仏教会会長。島根県文化
財所有者連盟協議会会長。

前田専學理事長から 3 年後に中村元先生の
生誕 100 年を迎える、この時までには松江に
中村元記念館を設立したいと願っている。実
現の為に尽力せよ、とのご下命を受けたのが
平成 21 年の秋だったと記憶しております。

谷口副理事長、河原事務局長の強いサポー
トを受け、紆余曲折はあったものの松江市当
局のご理解と中海 5 市経済界の強いご支援の
お蔭で中村元博士生誕 100 年に当たる平成
24 年 10 月 10 日、博士 13 回忌の祥當日に魔事無
く開館することが出来ました。

開設前は哲学書を保管する記念館、土日に
関係者が交代で開館すれば充分だろうと高を
括っていたのですが、いざオープンしてみら
ると北は北海道、南は沖縄まで、全国各地から
中村博士を慕う方達が押し寄せ、月 1000 人
を下らない盛況に驚くとともに、責任の重
さを痛感致しました。

今年開館 5 周年を迎えますがこの間、公益
財団法人中村元東方研究所理事長前田専學先

生をはじめ関係の先生方には一方ならぬご協
力・ご厚情を頂戴してきておりますこと感謝
申し上げます。

この度前田専學理事長より理事就任のご依
頼を頂戴し、その任に非らずとは存じました
が、中村元記念館と東方研究所の絆を一層強
め、中村元記念館創設より今日まで頂戴しま
したご恩の万分の一でもお返しできればと思
い、僣越ではありますがお返しが出来ません
ので、微力ではありますが中村元博士「慈しみ」
のご精神を敷衍し、当研究所益々の隆盛の為
に精一杯努めさせていただきます。ご指導ご
鞭撻をお願い申し上げます。

監事ご紹介

尽きし無し

吉田宏哲 監事



よしだ ひろあき
昭和 10 年埼玉県本庄市生まれ。昭和 36 年東京大学文学
部哲学科卒業。昭和 46 年東
京大学大学院博士課程（印
度哲学仏教学専攻）満期退
学。昭和 58 年大正大学教
授。平成 17 年大正大学名誉
教授。

昭和 40 年東大の大学院人文科学研究科（イ
ンド哲学専攻）に入学して以来、中村元、平
川彰、玉城康四郎などの大先生に教えを受け、
『大日経住心品』蔵漢対照研究』修士論文を
提出した。博士課程に入学したとき、中村元
先生の教授室に呼ばれ、東大仏青の主事を薦

められ、有難くお受けして、2 期 4 年間務め
た。その後半、東大紛争で授業が出来なくな
り、仏青の部屋を授業に使ったため、会員や
外部の学生が主事や理事長の糾弾大会を開
き、投票でどちらが正しいか決を採ったとこ
ろ、主事の方に賛成が多く集まったので、授
業を続けることが出来た。

昭和 46 年に博士課程を満期退学し、すぐに
大正大学の非常勤講師になり、2 年後に専任
講師に就任、昭和 55 年に助教授、58 年に教授
に昇任した。その間、昭和 50 年から 2 年間、
ドイツのハンブルグ大学に大学の海外研修員
として派遣され、シュミットハウゼン教授の
もとで唯識を学ぶ。平成 3 年「空海思想の形
成過程の研究」で審査員、高崎直道・三崎良
周・福井文雅の三先生で学位を取得。論文博
士のつもりが制度の切り替えで課程博士（文
学）を拝受。平成 17 年退職するまでの間に、
埼玉大、東大、名大、信州大、駒沢大、立教
大、二松学舎大、高野山大などの非常勤講師、
客員教授を歴任した。また中村元先生が初代・
第 2 代会長を勤められた比較思想学会の会長、
2 期 6 年間勤め、日本密教学会の会長、印
仏研、日本仏教学会、智山勧学会の理事、地
球システム倫理学会（副会長）を歴任。密教
学芸賞、密教教化賞などの賞を受賞。真言宗
智山派の定額位大僧正、総本山智積院の菩提
院結衆・集議。

この度は、世界の学界や思想界の先駆者中
村先生が創設した中村元東方研究所／東方学
院の監事として尽力できる光栄に恵まれ千載
一遇と思ひ最善にて奉仕したい。

東方学院

東方学院

講師のご紹介



東方学院では、開講講座の編成に随時見直しを加えながら、インド思想や仏教の分野を中心に、時宜にかなったテーマ、話題の講師による連続講座など、東方学院ならではの講座を例年開講しています。今回は、横山紘一講師と勝本華蓮講師にお話をうかがいました。

横山紘一 講師

(東京本校)



よこやま こういつ
昭和 15 年福岡県生まれ。東京大学農学部水産学科卒業後、東京大学大学院印度哲学科博士過程修了。東京大学文学部助手を経て、現在は立教大学文学部名誉教授、一燈仏子寺佛学院院長。

私は大学時代、はじめは水産学科で魚の血の研究をしていました。人間が癌にかかると増えると思われるヘモグロビンの一種のハプトグロビンが魚にもあるかどうかを研究しました。その結果、なんと二十種類の魚の血液の中すべてにハプトグロビンがあることが分かり、魚と人間とは同じ生命でつながっているのだと感動しました。

しかし次第に生命をそのように対象的にまた還元的に解明することよりも、その生命を研究しているこの私の「いのち」を一生追究していこうという思いが募り、水産学を辞めてインド哲学科に転向して、仏教を学びはじめました。そこで初めて「唯識」という思想があることを知り、以来五十余年、

唯識思想の研究と実践とに従事してきました。

いま「実践」といいましたが、唯識の教理をいくら学問的に研究しても、その教理に則して実践しなければ、その研究は無駄に終わってしまいます。そのような観点より、私は現在、唯識をできるだけ生活に則して講じるよう努力しています。

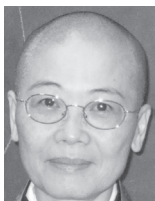
唯識は本当に科学と哲学と宗教との三面を兼ね備えた普遍的な素晴らしい思想です。そのような素晴らしい思想を東方学院で講じることができる縁をいただき、嬉しく思っています。

東方学院・現理事長の前田専学先生からも多くの有難い御縁を賜りました。印哲にかわって間もなく、お嬢さんの家庭教師をしたこと、またご家庭で先生直々に握っていたいただいたお寿司をご馳走になったことなどが、懐かしく思い出されます。

勝本華蓮 講師

(関西校)

三十一年前の秋、大阪の南御堂



かつもと かれん
昭和 30 年大阪生まれ。平成 12 年京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。博士(文学)。花園大学非常勤講師、叡山学院専任講師を経て現在に至る。研究書・翻訳書の他、一般向け書籍も出版。

で、中村元先生のご講演があった。それが私が直に先生のお姿を目にし、お声を聞いた唯一の思い出である。その時は、まさか自分が後にそのお名前を冠する学院の講師になるとは夢にも思わなかった。当時、私は広告の仕事をしていて、お寺とも縁がなかった。ところが私は仏教の道で生きるべきだと思い定め、仕事もやめ、日本仏教からインド仏教へと勉強を進めた。そしてサンスクリット語を学ぶことに。大学院は梵語学梵文学専攻に入ったが、仏弟子の研究からパーリ語が専門となった。やがてパーリ註釈書の重要さに気づき、それをもとに大乘仏教と関わりの深い菩薩の研究で、博士論文を書き、スリランカに留学した。帰国後、留学でも研究でもお世話になった森祖道先生の所にご挨拶に伺うと、東方学院の講師に推薦してくださることになった。当

東 方 学 院

時、先生は東京本校でパーリ語を教えておられたのである。私は京都でパーリ語を担当ということで、面接を受け採用されたのだが、後に仏教入門講座の担当に変わった。

今年度、新たにパーリの『テーリーガーター』(長老尼偈)を読む講座を開いた。授業では、中村先生が和訳された岩波文庫本を教科書に、註釈書も参照している。註釈では尼僧たちの出家の経緯が前世の因縁から説明される。受講生との出会いもなにかの縁。これまで私も多くの先生方にご縁を得、直接に間接にご指導いただいた。そのご恩返しができればと思う。

東方学院 研究会員の声

西内之朗さん

(東京本校)

発憤忘食 樂以忘憂
不知老之将至云爾

(論語165述而第7)



退職後10年。赴くままに学習

の場を訪ねた、近くの公民館、博物館、図書館。近郊の大学の地域社会人向け講座、対象のある大学の講座。そして東方学院というわけである。地域の歴史、関東古代史、中国東アジアの歴史、論語と日本人儒家の系譜。そして古代インドと印哲と仏教にたどりついた。

土曜日の午前中が、釈先生の三韓三国遺事。百済はなぜクダラなのか、韓国ではあくまでペクチェだというのが。米文化の百済と倭国の関係。新羅仏教の日本への影響など、新たな好奇心が湧き出してくる。午後は、宮本先生の視点から、論語、老子、最澄VS徳一、空海とたどって、今年度は、ガンデイ自叙伝。東洋思想の探求も核心に入ってきている。

神田明神界限で昼食を探し、秋葉原の萌え女子を横目に、気ままに楽しく学習は続けたい。皆さんもどうぞと言いたいところだが、学びたい一人にでも講座が開かれるここでは、マンツーマンもあり得るのだ。歳を忘れて学ぶものには最高の環境というべきだろう。

石川和雄さん

(中部校)

私は、定年を機に入学した大学が宗門系の大学であったことから、仏教書を読むようになりました。専攻は歴史学(中国史)でしたが、仏教の世界も覗いてみました。その結果、次のようなことを思いました。(1)インドでは、仏教は常に非主流であった。インド仏教は主流であるバラモン・ヒンドウ教との関係において理解する必要があります。(2)インドの外では、地域的に偏って定着した、思想を異にする仏教が、時を経て、出会う時代を迎えた。(私の周りには、家には阿弥陀仏を安置し、個人としては上座部の瞑想会へ通って

いる人がいます。) 仏教史という点からみて、興味深い現象であると思つて注視しています。

東方学院は植木雅俊氏の著書で知りました。入会して3年目になります。今年度は、服部先生の「原始仏教の世界」と佐久間先生の「サンスクリット語」を受講しています。「原始仏教」のテーマは、「在家信者に説かれた教え」です。出家という生き方を勧めた釈尊が在家の信者に何を説いたか、興味深い講座です。語学は、別に「中国語」も学んでいることから、「大丈夫？」と知人に言われます。それを激励と解して取り組んでいます。





2月20日(月)開催 新春研究発表会

於 東京・ホテル東京
ガーデンパレス

恒例の新春研究発表会が、ホテル東京ガーデンパレス・高千穂の間で、平成29年2月20日に開催されました。今回の講師は、堤博枝氏(東洋大学大学院)と吉田宏哲氏(大正大学名誉教授・文学博士)です。堤博枝氏は、平成28年度アジア諸国海外研究調査助成の帰朝



堤博枝氏



吉田宏哲名誉教授



報告として「インド細密画におけるバクテイの考察」と題し、インド美術研究に関する気鋭の発表を行いました。また、吉田宏哲氏は、「画でみる宗教と哲学」と題し、壮大なテーマを画像を用いてわかりやすく講演し、出席者約80名にて大変盛会となりました。

2月26日(日)開催 中部校主催公開講座 中村元インド哲学カフェ

於 名古屋・東別院会館

平成28年度 東方学院中部校主催 第二期中村元インド哲学カフェ
ブッダの入滅と仏塔信仰
 ～仏典と造形から読み解く～
 ブッダの入滅(死)は人々にどのように伝えられたのでしょうか?

●日時 2017年 2月 26日(日) 14:00-18:00 第
 ●会場 東別院会館1号 講堂(名古屋市中区) 〒460-0016 名古屋駅西口徒歩2分
 ●参加費 無料(会場費) 参加費 4,000円(お茶代) 会場費 2,000円(お茶代) 会場費 2,000円
 ●定員 1000名(申込制) 申込受付 2月 25日 まで(先着順)
 ●申込先 東別院会館 申込先 東別院会館 〒460-0016 名古屋駅西口徒歩2分
 TEL: 052-222-1400 FAX: 052-222-1401 E-MAIL: info@hokuryu.ac.jp
 ※本講座は、東別院会館主催の公開講座です。参加費は無料です。会場費は2,000円です。お茶代は別途です。お申し込みは先着順です。お申し込みは先着順です。お申し込みは先着順です。

プログラム
 カフェ1: 遺跡仏典にみるブッダの入滅 服部育郎講師
 カフェ2: ブッダの神格化と仏塔信仰 松久間留理子講師
 カフェタイム: 自由討論
 14:00-18:00 名古屋駅西口徒歩2分

東方学院中部校主催の公開講座

「中村元インド哲学カフェ」が、東別院会館(名古屋市中区)にて開催されました。「中村元インド哲学カフェ」は、インド文化・仏教文化をまるごと楽しむ、参加型体験講座です。今回は「ブッダの入滅と仏塔信仰・仏典と造形から読み解く」と題し、服部育郎講師

(東方学院講師)が、原始仏典にみるブッダの入滅について、パリ語で書かれた『大般涅槃經』に基づき解説しました。また、佐久間留理子講師(東方学院講師)は、仏塔の象徴性とその思想的・宗教的背景について解説しました。また「カフェタイム」参加者全員で気軽に対話できるひととき」で、3名の専任研究員(佐久間留理子、服部育郎、平野克典)と参加者が自由にフリートークを行いました。参加者からはさまざまな質問が飛び交い、さまざまな議論が繰り広げられました。

5月19日(金)開催 仏教文化講演会

於 香川県高松市・法恩寺

香川県高松市の法恩寺様と当法人共催の仏教文化講演会が、法恩寺様を会場として、今年も、平成29年5月19日(金)に開催されました。東方研究所からは有賀弘紀専任研究員が「仏教とヨーガ」と題し講演を行いました。また、当日は、日本の童画家シリーズ⑦「大正ロマンの画家・竹久夢二の魅力

〜生涯と芸術、知られざる素顔に迫る〜」と題し、竹久夢二美術館学芸員 石川桂子先生による講演が合わせて行われました。

7月8日(土)開催 研究員総会

於 東京・仏教伝道協会 見の間

平成29年度研究員総会が、7月8日(土)、東京都港区の仏教伝道協会・見の間において開催されました。本年は平成29年度採用の新専任研究員2名を含む、26名の専任研究員が出席しました。前田専学総括研究員の開会の辞に始まり、平成29年度採用の新専任研究員・平岡三保子氏と袋井由布子氏の紹介および、執行部より研究員に対する通達・要請事項伝達等が



平岡三保子研究員



林慶仁研究員



行われました。また、研究発表「インド仏教美術の主題・図像・プログラム」(平岡三保子研究員) および、「初期プラマーナ文献間の関連性について」(林慶仁研究員) が行われ、活発な質疑が行われました。引き続き懇談会を行い、新研究員と旧研究員の間で意見交換が行われ、盛況にて終了しました。

7月29日(土)開催 神儒仏合同講演会

於 東京・神田神社



神田神社・湯島聖堂・中村元東方研究所の三団体共催、神儒仏合同講演会の第9回が、7月29日(土)午後1時～4時、神田神社祭務所ホールにて行われました。今回は、共通テーマ「今」を生

きぬく」で、神道からは、小野善一郎講師(湯島天満宮 権禰宜)による「日本を元気にする古事記のこころ」、儒教からは谷中信一講師(日本女子大学教授)による「求められているのは「知恵」と「覚悟」」による、田上太秀講師(駒澤大学名誉教授)による「日々新なり、また日新なり」と題した講演が行われました。「今」をどう生きぬき、人生を豊かに、意味あるものとするのか、という重要なテーマに導かれ、出席者は総勢150名、満席の大盛会となりました。

【今後の行事ご案内】

★東方学院・酬仏恩講合同講演会
日時・平成29年12月2日(土)
会場・薬師寺 まほろば会館
(奈良県奈良市)

※詳細は決まり次第、ホームページ等でお知らせ申し上げます。
※詳細は決まり次第、ホームページ等でお知らせ申し上げます。

★新春研究発表会

日時・平成30年2月19日(月)
会場・東京ガーデンパレス

※詳細は決まり次第、ホームページ等でお知らせ申し上げます。

平成29年度芳名録 (五十音順・敬称略)

本年度も多くの皆様にご支援いただきました。心から御礼を申し上げますとともに、ご芳名を記します。
※平成29年9月30日受領分までを掲載しております。

維持会員

石上和敬 小笠原勝治 オリオン産業 川崎寿子 川崎大師平間寺 来馬明規 金剛院仏教文化研究所 斎藤敬 西来寺 下重好正 下田勇人 釈悟震 春秋社 淳心会 (日野紹運) 菅原信海 末廣照純 浅草寺 高崎宏子 高松孝行 多田孝文 中央学術研究所 千綿道人 角田泰隆 奈良康明 成田山新勝寺 西岡祖秀 日本ヨーガ禅道院 念法眞教 羽矢辰夫 仏教伝道協会 法恩寺(藤原敏文) 法清寺 前田専學 前田式子 松久保秀胤 水野善文 武蔵野大学 高尾山薬王院 吉田宏哲 渡邊信之 渡邊寶陽

賛助会員

秋葉佳伸 阿部敦子 有馬頼底 粟野芳夫 石井勝彦 今西順吉 入江宥道 石上智康 白井ふじ子 宇杉真 遠藤康 大谷光真 太田正孝 小笠原隆元 岡田真美子 岡田行弘 荻山貴美子 桂紹隆 菅野博史 北村彰宏 黒田大雲 小林和子 小林正和 小林守 小峰啓誉 小峰立丸 小山典勇 斎藤明 佐久間秀範 佐久間留理子 櫻井瑞彦 桜井俊彦 佐藤行教 末木文美士 浄土真宗東本願寺派本山東本願寺 須佐知行 関戸堯海 千賀正榮 大海修一 田上太秀 武田浩学 竹田軍郁 立花ひろ子 田丸淑子 田原豊道 千葉よし子 鶴谷志磨子 東洋哲学研究所 徳育経営研究所 戸田裕久 鳥山玲 長野市南長野仏教会 中谷信一 中村行明 中村保志孝 西内之朗 西尾秀生 西川高史 西宮寛 畠中光亨 花岡秀哉 花山多賀江 濱川香雅 里 濱川量子 久富幸子 一島正真 一月正人 平井恭子 福留順子 藤井教公 藤井知興 堀江順司 堀越教之 松原光法 的場裕子 水谷俊一 水谷浩志 宮元啓一 森祖道 矢島浩志 山口泰司 山本文溪 由木義文 好井瑞皖

ご寄付

岡村光展 佃宣昌 前田専學 松久保秀胤

研

究

所

コ

ラ

ム

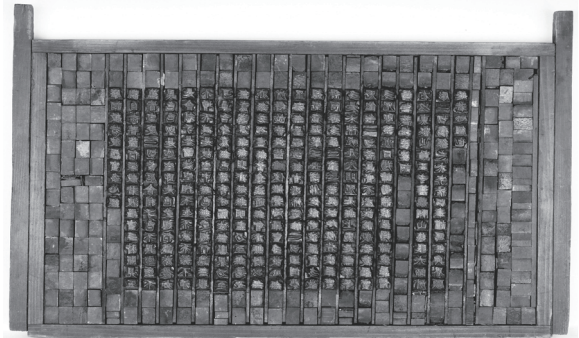
水上文義 専任研究員

読書の秋に、 活字離れ今昔二題

近年あちこちで多くの人がスマホやタブレット端末とにらめっこしているのを見かけます。たいていはゲームなどネットサーブिसで、一部が電子書籍での読書でしょう。活字離れがいわれて久しく、おかげで出版社は経営に苦労しているとか。

電子媒体は確かに便利ですが、古来、伝達媒体の主役は印刷物でした。現存する世界最古の印刷物の一つが法隆寺の通称「百万塔陀羅尼」で、もちろん板木印刷です。そして明治からは活字印刷（活版）が常識になります。ところで日本には四百年も昔に活字印刷が存在し、しかも一度「活字離れ」しているのをご存じですか。

日本での活字印刷は安土桃山時代にイエズス会宣教師が刊行したキリシタン版や、文禄の役の戦利品である朝鮮銅活字による文禄勅版『古文孝経』（現存しない）が最初とされます。以来多くの活字版が刊行されますが、大規模な活字遺存例に徳川家康による駿河版の銅活字と伏見版木活字、天台僧宗存による宗存版、慈眼大師天海の天海版木活字（いずれも重文）があり、宗存は一切経刊行を目指し、天海は日本最初は一切経（天海版）を活字印刷で実現しまし



天海版木活字『般若心経』展示用組版（寛永寺蔵・重文）

を「古活字版」といいますが、経費もかかり耐久力も乏しかったので、やがて主流は板木印刷に戻ります。江戸初期の「活字離れ」でしょうか。

経済性と利便性、理由の異なる二つの「活字離れ」ですが、マスプロ文化史上の先人達の苦労を知って改めて「本」とおつきあいたり、古活字版のホンのちよつとした豆知識などを仕入れて古書店をのぞいてみるのも、おもしろいかもかもしれません。

た。また本阿弥光悦と豪商角倉素庵の「嵯峨本」は芸術品ともいえる超豪華本でした。この一七世紀初頭のわずかに五〇年ほどに刊行された活字版

みづかみ ふみよし

昭和 25 年東京生まれ。大正大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。平成 18 年博士（仏教学）。中村元東方研究所専任研究員、東方学院、大正大学大学院など講師。著書『台密思想形成の研究』『日本天台教学論—台密・神祇・古活字—』いずれも春秋社、共著翻刻・解題『神道大系論説篇 天台神道（下）』神道大系編集会、ほか。

新 刊 案 内

水上文義著 『日本天台教学論』



台密研究の第一人者による画期的論集。美術・神道など、多角的な視点から、日本天台思想のさらなる解明に資する刮目の書。円爾弁円の密教説と台密、台密における胎内五位説の検討…など 19 篇の論考を収録。

単行本：383 頁
出版社：春秋社 言語：日本語
ISBN-10：439311275X ISBN-13：978-4393112755
発売日：平成 29 年 7 月 10 日
定価：本体 9,000 円（税別）

研究活動の紹介

科学研究費 基盤研究 (C)

ヴァイシェーシカ学派の 〈関係〉概念の 総合的研究

平野克典 専任研究員

△本研究の目的と意義▽ 眼前の飛び回る白い犬。古典を紐解くと、その白い犬を次のように分析する一派がインドの哲学にはあったことがわかる。「白い犬」は白色(属性)と犬(実体)が結び付いたものであり、また、犬の足(実体)と地面(実体)との「結合と分離」の繰り返しによって「飛び回る」という運動の連続が犬に発生する。その一派とは、およそ紀元前二世紀頃からの歴史をもつ、ヒンドゥー教の正統哲学派の一派、ヴァイシェーシカ学派である。

同学派の学説の特徴はカテゴリー(範疇)に基づく現象世界理解にある。すなわち、実体、属性、運動、普遍、特殊、内属関係という六種のカテゴリーに基づいて現象世界を分析する。そして、そのカテゴリー論は同学派の枠を超え、いわばインド哲学の存在論の基本的な枠組みとして機能した。

さて、ヴァイシェーシカ学派の存在論に関する研究史を眺めると、従来、結び付けられるもの(関係項)に着目されてきた傾向がある。先の例でいえば、「白色と犬」、また「犬の足と地面」といった実体や属性などに着目した存在論研究である。そこで本研究では視点を換え、結び付けるものである△関係▽に着目して同学派の存在論の再評価を目指している。すなわち、同学派が説く、内属関係と結合関係の二種類の△関係▽が研究の対象となる。(先の例でいえば、内属関係によって白色と犬は結び付き、結合関係によって犬と地面は結び付く。)

△これまでの研究成果▽ 本研究の主たる研究対象は結合関係である。まず、結合関係の概念をサンスクリット語で書かれた哲学文献に依拠して分析している。具体的には、五世紀頃の『パダルタ・ダルマ・サングラハ』と、同書に対する十世紀頃の三本の注釈書(『ヴィヨーマヴァティ』など)に言及される「結合関係の章」を通じた分析である。

平成 28 年度には海外調査を実施した。具体的には、ニューデリー、プネー、ベナレスの図書館や研究所を訪れ、上記文献の写本を閲覧、蒐集した。写本参照の目的は緻密な読解の基盤作りにあるのだが、複数の写本や刊本の比較検討は、テキスト生成の過程を推測させる飽きない作業でもある。

また、同年度には留学時代の恩師であるインド人の先生に個人授業を依頼し、「分離の章」の一部を読み解いた。個人授業ではときに、インド哲学の伝統を背景にテキスト内容に対する辛辣な批判や斬新な解釈を先生から示してもらえ、場面もあり、刺激的な時間である。

新 刊 案 内

仏教史研究会編 『仏教史研究ハンドブック』

仏教史研究 ハンドブック



インド、アジア諸国・地域、中国・朝鮮半島、日本の“仏教史”に関する研究テーマを地域横断的、通時代的に見渡しながら、わかりやすくコンパクトにまとめた入門書。仏教史を学び始めたい人、幅広く、深く知りたい人に最適。

単行本：410 頁
出版社：法蔵館 言語：日本語
ISBN-10：4831860050 ISBN-13：978-4831860057
発売日：平成 29 年 2 月 15 日
定価：本体 2,800 円 (税別)

研究員の声

平岡三保子 専任研究員

石窟のささやき

私は博士後期課程在学中にプーナ(現プネー) 大学に一年間留学する機会を得ましたが、大学がデカン高原西北部に位置していたため、石窟寺院を頻繁に訪れ調査する事ができました。岩山を開削して窟内に寺院空間を創出するという壮大な建造物の数々に圧倒され、エローラ第16窟(カイラース寺院)を最初に訪れた時には茫然と立ちすくんだ事を記憶しています。留学当時はまだ訪問客も少なく、人気の少ないほの暗くひんやりとした仏教石窟内にひとり静かに身を置くとはるか二千年以上も前にタイムスリップし、修行した比丘たちの意識に触れるかのような思いがしました。まもなく窟内に配された壁画や彫刻が雄弁に語りはじめます。石窟に刻まれた言葉にならない沈黙の中のささやき：それを聞き取るのが私のインド美術史家としての役割だと感じま



エローラ石窟群
第12(仏教)窟前にて

した。

留学後まもなく結婚した事で石窟研究は途切れがちでしたが、平成19年によくやく学位論文を提出、これに基づき平成21年には科研費の研究成果公開促進費を得て『インド仏教石窟寺院の成立と展開』(山喜房佛書林)を出版しました。現在も科研費で石窟研究を継続中でしばしば訪れますが、ご周知の様にインド社会は近年大きく発展し、石窟を取り巻く環境も変化しています。世界遺産のアジヤンター、エローラは外国人だけでなく多くのインド人観光客、小学生的遠足、学生の研修旅行などで賑わい、写真撮影も一苦勞です。私の方も子供や若者が土足のまま彫像によじ登りはしゃぐのを見る

とつい厳しく注意するような、「こわいおばさん」になってしまいました。

以前は廢墟同様だった初期仏教窟にも、最近では早朝ウォーキングに始まり遠足やデートスポットとして始終人が集まっています。元々石窟寺院は参拝者が多く訪れた場だったので、マナーの問題を除けば石窟への現代インド人の関心が高まるのは喜ばしい事でしょう。偉大なる古代インドの叡智のささやきを石窟から聞き取る「耳」が増える事を祈り、少しばかりささやきの音量を上げるとお手伝いを続けたいと思っています。

ひらおか みほこ

名古屋大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(文学)。インド・仏教美術史専門。現在中村元東方研究所専任研究員、東方学院関西校主事・講師、龍谷大学仏教文化研究所客員研究員、その他大学非常勤講師・論文・著書多数 (<http://hiraoka.namaste.jp> 参照)

新 刊 案 内



前田専學編 『原始仏典Ⅲ 増支部経典 第二巻』

『パーリ語三蔵』の「経蔵」に収められている原始仏教経典、『長部経典』『中部経典』『相应部経典』につづく『増支部経典(アングッタラ・ニカーヤ)』の現代語訳。本巻は第3集(全16章)を収録。

単行本：352頁

出版社：春秋社 言語：日本語

ISBN-10：4393113527 ISBN-13：978-4393113523

発売日：平成29年4月19日

定価：本体6,000円(税別)

研究員の声

袋井由布子 専任研究員

「達羅毗荼(ドラヴィダ)国は周囲六千余里ある。国の大都城は建志補羅(カーンチープラ)と号し、周囲三十余里ある。土地は肥沃で、農業は盛大である。花・果は多く、珠寶を産出する。気候は暑熱で、風俗は勇猛である」(水

今日も村々では仏像が「ブツダール」とよばれ、拜まれつづけている。ヒンドゥー教神像の秀作と比較しても遜色ない造形力、力強いモデリングに息を呑むような仏像が、村の片隅にひっそりと鎮座している。

谷真成訳『大唐西域記』平凡社、昭和46年)、これはパツラヴァ朝の都カーンチープラムを七世紀に訪れたとされる玄奘の記述である。私が十年近くを過ごしたインド深南部のタミル・ナードゥ州は、玄奘が見た風景のように、色鮮やかな花が咲きほこり、南国の果物が溢れる暑い土地であった。博士論文作成のためヒンドゥー寺院を渡り歩き、神々の姿に魅了される一方、私の目の端には仏の姿が見えていた。タミル・ナードゥ州では多くの仏像が出土し、

玄奘が訪れたカーンチープラムは現在、ヒンドゥー寺院が林立し、インド各地から信者が巡礼にやってくる。このヒンドゥー教の聖地について玄奘は、「伽藍は百余カ所、僧徒は一万余人、みな上座部の教えを学習している」(同上)と伝える。かつての仏教隆盛を裏づけるかのように、今日のカーンチープラムには、学校の校庭、警察署の敷地内、ヒンドゥー寺院の境内・・・至るところに仏像を見ることができている。それらの仏像は、頭頂部の炎の表現、着衣法、坐法など、共通した形式を有している。それはカーンチープラムの仏像に限ったことではない。タミル・ナードゥ州全土、西隣するケララ州時に峻険な西ガーツ山脈の中に残

る仏像も同じ形式を見せている。同時に仏像の作風は多彩で、中には16世紀頃のヒンドゥー教神像と近似した表現様式の仏像もある。未だインド深南部の仏教史については不明な点ばかりである。史料も限られており、当地での仏教信仰の実像を明らかにするのは容易ではない。しかし、同地域において仏像を対象とした礼拝法、それに応える仏像美術の活動が長らく続いたことは疑う余地がない。インド深南部からの仏教関連の出土品を、美術史研究の視点で考察することは、インド仏教史を再考する上でなんらかの役割を果たすことになるのではないか。そう信じ、今もブツダルを拝するため、タミルの村々を歩きつづけている。

ふくろい ゆうこ
昭和42年東京生まれ。専門はインド美術史。成城大学大学院文学研究科(美学・美術史専攻)修了後、平成5年よりインド政府給費留学生としてタミル・ナードゥ州マドゥライ・カーマラージ大学、さらにマドラス大学に在籍。平成15年、マドラス大学より博士号を取得。著書に『インド、チョーラー朝の美術』(東信堂)、『旅の指さし会話帳76・南インド』(情報センター出版局)等がある。



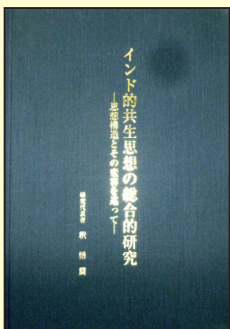
タミル・ナードゥ州での現地調査

新 刊 案 内

積悟震編 『インド的共生思想の総合的研究』

積悟震研究代表者による、科学研究費基盤研究(A)「インド的共生思想の総合的研究」の最終成果となる、20本の論文集。現代社会における喫緊の主題である、宗教、哲学、文学に見られる異宗教間の共生思想に関わる研究を、インドを軸としつつ、南アジア、東南アジア諸国、そして東アジア(中国・韓国・日本)の多岐にわたるテーマで論じる。文献研究にとどまらず、哲学的解明や図像研究、さらにはフィールドワークも一部含まれている好著。

単行本：584頁
出版社：白峰社 言語：日本語・英語
ISBN-13：974-4-938859-29-9
発行日：平成29年3月25日
非売品



事務局通信

【編集部より】

東方だよりは、読者の皆様からのご意見・ご要望をいただき、よりよい誌面にしていく所存です。また、ご寄稿もお待ち申し上げております。尚、ご連絡は手紙（宛名面に「東方だより編集部宛」とご記入願います）にて承っております。

当研究所の活動にご賛同下さる皆様へお願い

公益財団法人中村元東方研究所は、創立者中村元の理想を実現するため活動する非営利の文化事業財団であり、その運営はご理解ご協力いただける皆様からのご寄付により成り立っています。当研究所では各種会員を設定して、活動趣旨にご賛同いただける皆さまの積極的なご支援をお願いしております。

(1) 一般寄付

一般寄付は会費と異なり、金額や期限等を設定せずに、随時受け付けさせていただいております。お寄せいただいた寄付金は、当法人が取り組んでいるさまざまな活動に広く活用させていただきます。

(2) 継続ご支援（維持会員・賛助会員）

当法人の活動に賛同し、継続的に支援して下さる会員も随時募集しています。

- ・維持会費：一口 年 50,000 円
- ・賛助会費：一口 年 10,000 円

※上記いずれかをお選びいただき、出来れば複数口でご支援賜れば幸いです。

(3) 普通会員：年会費 7,000 円

普通会員にも、維持・賛助両会員と同じく、定期刊行物『東方』の他、催し物、会合等のご案内をお送りいたしますが、年会費に税の優遇措置は適用されません。

【所得税の免税について】

当法人は内閣府の認定を受け、平成 24 年 7 月 2 日をもって、従来の財団法人から「公益財団法人」へと移行いたしました。公益財団法人へ移行したことに伴い、上記 (1)、(2) の一般ご寄付及び維持会・賛助会の会費は、下記の通り税制上の優遇措置が受けられます。

※所得控除・・・所得控除は、所得金額に対して寄付金額の大きい場合に減税効果が大きくなります。「その年の寄付金額－2,000 円」が課税される所得金額から控除されます。控除できる寄付金額はその年の総所得金額等の 40% 相当額が限度となっております。

公式ホームページのご案内

東方研究所及び東方学院の公式ホームページでは、さまざまな情報が随時更新されております。是非ご覧下さい。

ホームページ URL : <http://www.toho.or.jp>

中村元東方研究所

検索

- ▶当研究所の目的・理念・あゆみ
- ▶中村元博士の略歴・著作文献目録
- ▶東方学院（開講科目、講師紹介、著書紹介）
- ▶専任研究員紹介、書籍案内
- ▶公開講座、イベントのお知らせや開催レポートなど



東方だより 平成 29 年度前期号 (通号第 30 号)

平成 29 年 10 月 10 日発行

【編集 / 発行】公益財団法人中村元東方研究所 本部事務局 (東京)

編集責任者：釈悟震

〒 101-0021 東京都千代田区外神田 2-17-2 延寿お茶の水ビル 4 階 TEL: 03-3251-4081 FAX:03-3251-4082